

特集対談

# 12年間の集大成 卒業プロジェクト

木村義人

23期生1～8年元担任

浦上裕子

23期生9～12年現クラスアドバイザー

白田拓子

聞き手

Text : Eri Yoshizawa Photo : Kazuhiko Hakamada



## 学びの集大成である「卒業プロジェクト」について

浦上先生(9～12年現クラスアドバイザー)・

木村先生(1～8年元担任)にお話を伺いました。

**白田** シュタイナー学園の「卒業プロジェクト」とは、具体的にどんなものですか。

**木村** 自らテーマを決め1年間かけて探究した成果を発表し、レポートにまとめるという12年間の集大成です。そこにはふたつの学びの道すじがあります。ひとつは1年生から積み上げてきた学びのプロセス—自分たちの周りのものごとを知り、世界を知ること。もうひとつは「自分が何者でどのような人間なのか?」、自分自身を知っていくというプロセスがあります。けれど、自分自身を知ったとしても、自分と世界をどのようにに連続付けていくのかということには別の視点が必要です。それをこの卒業プロジェクトで、自身の興味あるテーマを深く追っていくことによって、マイクロコスモスとマクロコスモスが出会っていくということを彼らは学んでいるのです。世界に自分がどうかわかっていきたいのか、世界に対してどのような視点を持

っているのかということに気づいていく。卒業プロジェクトは、自分と世界のふたつのものを繋ぎ合わせるものだと思います。そのふたつのものを繋ぎ合わせるために、これまで学んできたさまざまな武器(日々の授業、絵を描くことや楽器を奏すること、手の仕事、オイリュトミー、ものづくりなど)を使って取り組むなかで、12年間やってきたものがひとつの形としてあらわれてくる。それが卒業プロジェクトといえます。そして、そのなかで輝いているものが彼らの個性ですね。

**浦上** 卒業プロジェクトで生徒たちは、意志と感情と思考のすべてを使って取り組んでいきます。初めて自分で企業に電話をかけてアポイントを取り、フィールドワークや集めた情報を掘り下げ分析し、それらをまとめて上げ、数百人の前で自分の考えを発表し、発表したことをさらに文字に起こして記録に残るものに仕上げる。17～18歳なので

不得手なこともまだまだありますが、クラスアドバイザーは1年間ずっと生徒の葛藤を見てきているので、発展途上であっても、総合的にこんなふうに育ってきているのだと理解しています。1年間かけてコツコツとこれらの難しい課題に取り組むことが、学校を卒業した後には彼らの足元を照らす光になるということを感じます。

**白田** 生徒たちは自分でテーマを見つけ、それを掘り下げていくなかで、必然的に自分自身と向き合うことになると思います。卒業プロジェクトを通して自分と向き合うなかで「未来への種」を見つけ、それが進路に繋がる生徒もいると思いますが、その辺りはいかがでしょうか。

**木村** 今回の12年生にも自分の好きなことが「気づき」になり、進路になった生徒が何人もいました。先生が与えたものを受け取るだけではなく、自分を見つめるために能動的になる「機会」を与えられるわけですから、そういう意味で卒業プロジェクトの持つ意味は大きいと思います。

**白田** 素晴らしい発表をするにだけがゴールではなく、失敗することも大切な経験なのかもしれないですね。うまくいかなかったとしても、悔しい思いをしたり、次はもっとこうしようと考えたりするなかで、自分を成長させることができる。それを17～18歳で経験できるのほとても大きなことですね。

**木村** 常識的な小さく出来上がった完璧な発表を目指すのではなく、その生徒自身が、将来的に何をしていきたいのかが見える発表のほうが、卒業プロジェクト

クトとしては意味があります。自分はこれを試してみても、こういう失敗をしたけれど、ここからこうやって頑張っていくぞと思えるもの。それはその生徒自身の未来の方向性が見える卒業プロジェクトになると思います。

**白田** これまでの卒業プロジェクトで印象に残るテーマや、卒業プロジェクトならではの取り組みがあれば教えていただけませんか。

**浦上** 人間の想像力で考えたことは、小さな範囲のことではないように思います。入口はその小さな窓でいいのですが、そこから入って掘り下げて、さまざまなことに出会っていきながら、キラッとした原石のようなものを見出せると思います。そこからそこら花が開くということ

を、生徒たちを通して垣間見ることが何度もありました。ある生徒は「動物が好きなのでテーマは動物にした」と申し出たのですが、あまりにも範囲が

広すぎるので、もう少し狭めましょうということになり、やがて「鳥」に絞りました。そして、鳥のどういところが好きなのかと話していると、最終的には鳥の羽の構造について興味があるということに行きついたので、理科系の生徒だったので、「羽」をテーマにして研究をしたところ、とても面白い発表になり、私自身もその発表から多くのことを学びました。その生徒は決して言葉上手に、とうとうと話すようなタイプではありませんでしたが、発表がとても面白いものであったので、卒業プロジェクトを通して自信をつけてくれたのではないかと思います。

**木村** 毎年面白い卒業プロジェクトがありますが、完成度が高くなくても、その生徒がどれだけそこに没頭して、気づきを得たかが大事です。発表としてはすごく上手でも、インターネットや本で調べたことをまとめているだけのものだと、なかなか人の心に響いていかない。うまくなくてもいいので、ほんとうに自分の興味で何かに取り組んだ結果や、自身がその過程で変化したり、何かに気づいた成果を見せてほしいと思います。

**白田** 調べたことをまとめるだけだと、パソコンから半径1メートルの世界で完結してしましますが、学校の外に出て、人に会い、さまざまなものを見たり聞いたり、手足を使ったりする人の体験をしているほうが、実りある到達点に達しやすいのかもしれないですね。

**浦上** 手足を使ってテーマを掘り下げていく生徒が、いい発表を作りやすいというのは確かですが、今年はコロナの影響で、フィールドワークが思うようにできないという事情があります。それでも思考の力を使ってよく分析をし、質の高い発表をした生徒もいました。そういう意味では、手足を使った活動が十分にできなくても、ここまでやれ

るということは、私も改めて知ったことでした。

**木村** 何かを思考し分析するということにおいても、外から取り入れたものを、一旦自分のなかで消化できているかどうかで大事ですね。自己のなかで消化して、それをもう一度自分のなかから取り出すことができていると、こちらに伝わってくるものがありますね。

**浦上** 好きなことを卒業プロジェクトで掘り下げ、それが職業に結び付いていった卒業生はたくさんいますが、その逆もあります。卒業プロジェクトでやり切った気が済んだので、惜しげもなく別の進路を選ぶ。

